

## 王家に生まれて

リチャード・ハフ  
茅原道昭 訳 作

### 第二章 王室の期待

我々は輝きと炎を持つ子供である

また戦きと涙をも合わせ持つ

ウィリアム・ワトソン卿…「五月のオード」から

1

1 マールボロ・ハウスの男子用の部屋の写真があり、それにはデヴィッドとバーティーが並んで座っている。花模様の裾飾りがある白いベッドカバーがベッドを覆い、その先の方にはきちんと折り目のついた部屋着用のガウンがたたんでおかれている。（当然

撮影のためなのだが）きれいに掛け布がしてある二脚の椅子があり、床にはスリッパが揃えてある。またベッドの間には小さな置時計のある棚が設えてある。

この棚には写真も並んでいて、ベッドの先のテーブルや壁にはさらに多くの写真があつた。また壁には他の装飾と同様、間違ひなく少年たちの母によつて選ばれた花柄の壁紙が貼つてある。写真には宗教的性格のものや親戚、友人のものであり、「親愛なるバーティーへ、トリア」「ソニーからデヴィッドへ、お元気で」と書かれている。あの王子、この大公爵夫人、何とか王、どこそこの女帝から来たものである。四つ扉のガラス張りの戸棚には少年の心に親しみやすい数多くの品物があつた。六分儀、小さな地球儀、こまごましたもの、そして判別はできないのだが、確

かにバーティーの手になる戦士の像がいくつもあった。このエンドワード朝の男子用の部屋は、少年たちの父や祖父が同い年の時に比べて明るいと感ずるであろう。それは死と悲嘆が支配する、偉大な曾祖母の時代における大霊廟のような暗さは微塵もない。

バーティーはパジャマを着て、一九一〇年の五月七日の朝早くにこのベッドから飛び起きたのだが、それはロシア帝国公式訪問の九ヵ月後のことであつた。彼は窓に走り寄り、カーテンを引いて、外を見渡した。静かで、澄みきった、光りに満ちた夜明けであり、満開の水仙がポールモール街とセイント・ジェイムズ公園にゆれてゐた。しかしバッキンガム宮殿の向こう、六百ヤードのところに夜の間に起こった死を伝える王旗が旗ざおの半ばにぶら下つてゐた。

バーティーはお祖父様の状態が良くないということを知つてゐた。三日前に彼はオズボーンに、デヴィッドはダートマスにもどつてゐるはずなのだが、彼らの父がこう告げた。「お前たちにはここで私と一緒にいてもらいたいと上官に電報を打つておいた。お祖父様はひどくお悪くて、ご臨終もそう先のことではないだらう」王妃がコーフの休暇から呼びもどされ、二日前に急行で到着してゐた。

バーティーは春の麗らかさと家族の死という対照的な光景から振り向いて、大声で叫んだ。「目を覚ますんだ、デヴィッド。お祖父様が亡くなつたんだ。見てごらんよ、旗が途中になつてゐる」

フィンチが数分後にやつて来たが、少年たちは着替えてゐた。「お祖父様が夜の間に亡くなられたのはわかりましたね」と厳かな声で彼が言つた。彼はバーティーのネクタイを直し、この時のためにいつも持ち歩いている柔らかな布で靴をさつと一拭きした。「お二人にとつて今日は大変な日になるでしょう。しかしお父上やお母上にはもつと大変なことでしょう」

フィンチはデヴィッドに注意を払つて、上のポケットのハンカチをきちんと入れ直した。「齒は磨かれましたか。あなた方がご自身を十五才でほとんど大人であると思つていらつしやることは存じてゐます。そしてまだ時々齒磨きをお忘れになることも」それから今日の予定について話しを移した。「皇太子ご夫妻はほとんど一晩中起きていらして、それでも君主とその配偶者としての義務と責任に向かおうとしておられます。一緒にいらつしやる時は静かに、思慮深くしていなければなりません。初めに、お父上が書斎でお二人にお会いになりたいとのことです」

今度ばかりはあのチャイムがあまりに身近な不幸のために鳴らなかつたのである。彼らは一緒に寝室を出たが、デヴィッドはバーティーが走るのを押し留めた。マールボロ・ハウスは物音一つなく、セイント・ジェイムズ公園とポールモール街の朝早い人通りのかすかな騒めきやひづめの音が聞こえて来るだけであつた。デヴィッドの性格上、彼はその早朝の出来事を重要に感じた。

父の顔は疲労で土色をして、お祖父様が亡くなったことを話しているうちに泣き出された。私たちがすでに王旗が半旗になっているのを見たことを私は悲嘆にくれて答えた。父は死の床の情景を詳細に語り続ける間、何も聞こえていない様子であった。それから突然に「王旗について何と言ったんだね」と尋ねた。

「宮殿の上に半旗でたなびいています」と答えた。

父は顔をしかめて、「しかしそれはすべて間違っているんだ」と呟き、まるで一人言のように古くから伝わる、含蓄のある言葉を繰り返した。「国王は死んだ。国王万歳！」そして侍従を遣って、絶対的な海軍のやり方ですぐにマールボロ・ハウスの屋根の上に旗ざおを取り付けるように命令された。一時間後王旗が屋敷の上に間近にはためき、ゆらいでいた。それは父が二十五年の治世の間どこに在住しようともなさったことなのである。

少年たちが王家の秘密情報経路、つまり召し使い、侍従、女官を通して、エドワード国王の死ぬ間際のことについて知ったのはそれからまもなくのことであった。四月二十七日の晩に国王はピアリッツのお気に入りのホテルから帰還したらしい。長い鉄道による移動と海峡横断で疲れていたとしても、健康状態は良好で、予定通りに国務を遂行し、コヴェント・ガーデンでオペラを見るこ

とを希望した。翌朝ハーバート・アスキス首相に拝謁を許すことで政治的危機の現実直面する。首相は最近の総選挙の結果、彼が現在掌握している多数派の人数が減ってしまったにもかかわらず、上院の力を制限する決意をしていたのだった。

国王は四月二十九日オペラを観劇した。今回は『ジークフリート』である。そして翌朝王家の専用列車でサンドリンガムへ向かった。激しい東風がその晩起こったが、国王は外国での長い滞在の後なので、自分の血統の良い馬を見に出かけたいと言った。彼がコーフで王妃と一緒にいたとしたら！ 実際には咳が出るほどの風邪をひいてしまったのであるが。国王の肺は五十年間ほとんど絶え間なく葉巻を吸い続けてきて、ひどく弱っていた。皮肉にも、彼がロンドンにもどって最後の晩餐の客となったのは修道女アグネス・カイザーであり、彼女は国王のお気に入りの慈善運動の一つである、彼の名にちなんだ病院を設立したのであった。彼がその弱った体を彼女の手に乗ねていたらよかったのだが。実際のところ翌日の晩（五月五日）には彼の日記に次のようなめったに見られない、そして最後の出来事になった事柄が書かれていた。「一人で食事をする」

明らかに健康がすぐれず、絶えず息をゼーゼーいわせていたけれども、翌朝国王は、ノリス卿を迎えるためフォーマルなフロックコートに着替えると言いつ出した。折り好く、最後の謁見者は彼の最愛の友人である、国際的銀行家のアーネスト・カッセル卿で

あった。「気分がすぐれなかったのだが、君に会いたいと思っていたのだ」国王はぜひ椅子から立ち上がりたと言いながら、覚束なく答えた。

その晩レイキング博士は国王の病状についての告示にサインをした。それはかなりの不安を生じせしめるであろうと彼は言ったが、もし告示があったならそれどころではないであろう。後に王妃は特に寛大な振る舞いで、国王の長年の愛人で、話し相手でもあったジョージ・ケッペル夫人を死にゆく王の枕元に呼び寄せた。この偉大なスポーツマンにとつて最後のニュースが国家上の存亡や新たな政治上の危機ではなく、競馬のことであつたのは相応しいことである。「ウィッチ・オブ・ジ・エア」がケンプトン・パークの春の二才馬盃において半馬身差で優勝です」と皇太子のジョージが国王の耳元でささやいた。「満足じゃ」と国王は呟き、それからまもなく午前零時十五分前に亡くなった。

マールボロ・ハウスによく帰宅して、新国王ジョージは記した。「最大の友人であり、父親の中でも最高の父親を失った。彼からは生涯一度として陰險な言葉を聞いたことがない。私は心臓が張り裂けんばかりで、悲嘆にくれている。しかし神は私の重責にお力を貸してくださり、最愛のメイはこれまでずっとそうだったように、私の慰めとなってくれるだろう」

## 2

四人の少年とメアリーにとつて父親の王位継承は、彼らの生活において多くの変化をもたらした。フロッグモアに代わって、家族はウインザー城という肌寒く、広大な王家の住居へ転居した。スコットランドではアバジェルデューに代わって、バルモラル城が彼らの住居となった。ロンドンではバッキンガム・パレス（いつもB・Pと呼ばれていたが）の一画を使用した。彼らの住居の中では最も愛されていない所だった。デヴィッドは特にこの宮殿のかび臭い匂いとずっしりとした絨毯の敷きつめてある廊下に沿って歩かなければならない大変な距離が嫌いだ。我々は母に会うためには予約をしなければならないね、とよく言ったものである」と彼は記している。

古い住居の中ではサンドリンガムのヨーク邸だけが彼らのものとなった。アレグザンドラ王妃の息子ジョージは、彼女の愛したノーフォークのヨーク邸から彼女を追いつもりはなかった。それで家族全体が人数の増えた従者たちとともに、屋敷に鮎詰めのようになっていたが、家族皆がその住居を愛し、とても満足していた。召し使いたちの意見は（召し使いの寝室の設備について尋ねられた時、「彼らは林の中で暮らしているのではないだろうか」とジョージは答えたという）求められなかった。それは明らかにバッキンガム宮殿と対照をなしていた。



デヴィッドは彼の生涯で最も大きな変化をこうむった。祖父の葬式の後、海軍の訓練を続けるためにダートマスへ帰った。しかし彼はこう回想している。「私の同期生が気の効いたお悔やみで私を迎えてくれた。しかし表現するのが難しいのだが、彼らの間には無意識のうちに私の新しい地位に対する微妙な尊敬の念が生まれていたのだった」物質的な面で、かつての国王の死とともに馬鹿げた変化が起こった。王位継承者として、デヴィッドは自動的にコーンウォール公の肩書きを与えられ、コーンウォールにおける巨大な富と地所、そしてロンドンの都心における大変な財産を相続したのである。ダートマスの春の時期には唯一の収入が、お菓子とちよつとした贅沢のために週一シリングだったのだが、今や彼の財産は数百万になっていた。

デヴィッドはこれらの財産や不動産には無関心であり、彼の父や祖父、妹や兄弟とは対照的に、彼の生活に必然的な、切り離すことのできなくなった儀式に対し嫌悪感をつのらせていった。およそ六才の時から将来の役割を予感し、彼はイギリスの一般大衆から隔てられるあらゆる事柄に自意識と怒りという反応を示した。他の少年たちと同等に交わることで普通の少年になりたいと望んだが、それは普通の大人としての生活を送りたいという強い願望と同じであった。

デヴィッドは決してこのことを人前で発言することはなかったが、年月を重ねるごとに国王になることよりも人生にはもっと大

切なことがあるのだと思うようになり、この役割を背負わされたことに怒りを憶えた。「王位の継承者になるに値するどんなことをしたのであろう」と、エドワード七世の逝去の後、彼がずっとつけていた日記帳に書き込んだ。フィンチだけが、すでにほとんど大人になったこの少年の怒りと憤慨の気持ちを理解し、口には出さなかったが、同情を感じていた。

後年になっていかにデヴィッドの義務感と責任感が鈍ろうとも、今の段階ではそれらが人生の莊重な儀式に対して彼が感じていた不本意を抑制していた。このことが、彼が父に対してもっていた真の恐れに加わったわけだが、その父は彼に対する理解と同様に、言葉でも不足していた。ジョージは国王になってから間もないある日、息子にきっぱりと言ったのだった。「お前はもう将来の国家的儀式に参加するうえで立派に成長している。その時大勢の人の視線がお前にそそがれるだろう。常に威厳をもって振る舞い、他の者に手本となるよう心がけなさい。すべての人に従順で、敬意を持ち、やさしくなければならぬ」これで終わりであった。

デヴィッドはガーター憲章の儀式と戴冠式を不平も言わず耐えていたが、そこではまばゆいばかりのガーターの衣装とどっしりした宝冠を身につけ、父の足下に跪いて誓いをたてなければならなかった。「私、皇太子エドワードは、尊崇の念から身も心もあなたの臣下となり、すべての国民を代表し、生死をもって忠実と真実を捧げましょう。神よ私に力を与え給え」

しかし皇太子としての公的な叙任は三週間後カナークン城において行なわれたのであるが、それ以前にデヴィッドの忍耐は限界を越えていた。初めて白いサテンの半ズボンと、白テンの縁取りがほどこされた紫のビロードのマントと陣羽織を見せられて、彼は着るのを嫌がった。それから彼の言う「家族のいさかい」が続いて起り、そこでは声を張り上げて、後に関係者全員が遺憾に思うような表現を使っていた。「海軍にいる友達は何と思うだろう。いいや、僕はこの道化芝居には何の関係もないんだ」とデヴィッドはわめいた。

しかし宥めたりすかしたりしながら、メイは息子の反発を押さえてしまった。「デヴィッド、お友達はわかってくれるでしょう。さあしつかりして、義務を果たすのです」

そして内務大臣のウィンストン・チャーチルが彼の称号を宣言して、父ジョージがそれを授けたのであった。七月半ばのゆだるような暑い日で、天気と同じように蒸し暑い群衆がつかけていたが、デヴィッドは万事を如才なく行なって、その後で母から褒めてもらうほどであった。もちろん父国王からは何の言葉もなかった。

またこの日デヴィッドは緊張で半ば気を失いそうになりながら、初めて公的なスピーチを行なった。それは、過激な国粋主義者の大蔵大臣、ロイド・ジョージに訓練を受けた後、ウェールズ語でなされた。

熱い歓迎を心からありがとう。そして私が我々の美しい国へこれから何度も訪れることをあなた方と共に願っています。あなた方が歓迎の辞で思い出させてくれたように、過去からの長い繋がり、チューダー王朝の家系、私の名前がデヴィッドであるのと同様に私がつ偉大な称号すべてが私をウェールズに結びつけ、今私は父祖の懐かしい故郷に帰って来たと言つて差しつかえないでしょう。

私は生きている限りこの日を忘れることはないと申し上げます。またウェールズに素晴らしい日が、私が新しい友人となったこの日がいつも印されていることを心から望んでいます。なるほど彼は若い友人です。そう、私はまだ未熟者です。しかし私には偉大な手本があります。愛すべき父と母、そして私の力になってくれる素晴らしい友人がいます。我々の旧くからの美しい言葉（ウェールズ語で）「神がいなければ、何もない。神は満ちている」を胸にきざみ、国王に対し、ウェールズに対し、あなた方すべてに対し私の義務を果たすことを望んでいます。

その間バーティーは彼の人生での英雄を見つけていた。それは英国海軍のルイス・グレッグ大尉であり、オズボーンで一九〇九年に初めて彼に出会っていた。グレッグは士官候補生すべてに人気があった。二十九才でラグビーの国際的選手であり、また海軍大

学の医療官補佐の地位にあった。グラスゴー大学の卒業生で、学生の間はスコットランドのチームでプレーしていた。オズボーンでは主に彼のコーチとしての腕前で有名であり、また称賛的であった。彼はそれを「その意味にまったくの曖昧さを残さない、豊かで、恐ろしく、明快な言葉」で実行した。また快活で、まったく恐いもの知らずな若者であり、バーティーを気の毒に思っていた。バーティーは彼の愛情に報われ、それは親密な友情に発展していった。このことは彼が成人になっても続いて、フィンチが幼年の頃から与えてきたものと同じくらいに、持続的な影響と力強い支えとなった。

そういつた頃、フィンチは、八月の暑さにもかかわらず、いつもの病気のためにたっぷり着込んだバーティーに付き添い、ポーツマスからスコットランド高地の奥、ロツホ・ミュージックの北にあるアルト・ナ・ギルトハザッフという地所まで夜行寝台列車の予約車両に乗り込んだ。その後の数週間のもう一人の付き添い人はジェイムズ・ワットといい、オズボーンの科学学科の主任で素晴らしい教師であり、また幸いなことに蚊ばり釣りの名人でもあった。数学との毎日の戦いは、釣りというもう一つの勉強でずっと楽になり、バーティーは「卓越した蚊ばり釣り人と凡庸な水打ち人とを分けるたぐさんのタッチ」を覚えるほど釣りが好きになった。

デヴィッドがバーティーと一緒にいないという事実は教育上での様々な段階における、兄弟の避けがたい別離という以上の意味があった。この場合はバーティーはまだオズボーンにいて、デヴィッドはダートマスにいたのだが。二人の少年は、一人であつたらとても淋しかったであろう少年時代から多くの喜びを分かち合っていたけれども、彼らは性格や気質において似てはいなかった。デヴィッドはバーティーの明らかな飲み込みの悪さや、日常生活におけるこまごましたことについて理解していないことに苛立っていた。また時折弟が感情を爆発させたり、突然怒ったり、暴れたりすることにびっくりすることがあった。彼はバーティーと一緒にいやすい、楽に付き合える相手だとは思っていなかった。とはいえ、彼らがまだ若く、メアリーがいて、彼らの大騒ぎに加わっていた頃は特に、一緒に冗談を言つて、大笑いをしたことが何度もあった。

バーティーにしてみると、実際はたいしたことはないのだが、デヴィッドの優れた学業成績に対し複雑な感情をもっていた。また人と会った時にいつも最初に注意を引きつける彼の鷹揚な、臆することのない態度にやや嫉妬を感じていた。デヴィッドにとつてすべては順調であるように思われた。バーティーほど意志の強くない少年であつたら負けていたであろう。彼はしばしば人を驚かすような隠れた勇氣によつて救われていた。ところがそれが現われるとデヴィッドを苛立たせるのである。目先の効くある提督

がこう言ったことがあった。「彼（バーティー）は今ほたいしたことがないように見える。しかし最後にはたいへんな大物になるだろう。私の言うことを憶えておき給え」

おそらく十代における彼らの関係は、十八ヵ月しか違わないたくさんの兄弟が感じるよりも、お互いがいいことを淋しく思っていないというほうが正しいであろう。愛情はあったが、それは態度に現われなくなった。デヴィッドが、快活で、大胆で、遠慮のない下の弟のジョージと仲良くなるにつれ、彼らの間の距離は広がっていった。その後は他の影響がそれを助長したが、特に彼ら若い男たちの生活に現われる女性がそうであった。

フィンチの役割はそれぞれの中立的な友人と指導者のままであり、少年たちを決してわけ隔てすることなく、どちらの悪口も言わず、心の中ではバーティーにより深い誠実さを育んでいた。

バーティーは、予期していたように順調にスコットランドでの療養から復帰し、数週間遅れてオズボーンの教室に戻った。彼の学業成績は情けないものになっていった。クラスのビリでない時は、下から二番目であった。彼の地位がなかったならば、きっとずっと以前に「退学」の先ぶれである警告を受けていたであろう。国王夫妻に通知表が届くにつれ、ジョージ王は次第に驚きと怒りを増していった。「バーティーはいつも私にとてもすまなく思っています」と上官のクリスチャン大尉は彼に手紙を書いたが、これはジョージをますます怒らせるだけとなり、特に息子が彼のひ

どい成績にこれといった関心がないように思われた時はなおさらであった。「彼は決断力と勇氣はあるのですが、それを勉学に応用することが困難であると感じているのです。けれども試合になるとそれが素晴らしく発揮されています」と善意にある大尉は父親を納得させようとした。

怒りと絶望からジョージ王はペンをとり、息子に手紙を書いた。

・・・こう言うのはつらいのだが、お前の勉学に関するこの前のワット氏からの通知は決して満足できるものではないのだ。彼はお前が勉強をまったくまじめに考えていないようであるし、またあまり熱心でもないと言っている。息子よ、これではいけない。このままでいたら、お前の学年のビリになつてしまふだろう。今は七十一番で、気をつけないと試験に合格しないだろうし、今度はたぶん警告を受けるだろう。

お前が海軍に入るのがお母さんと私の強い願いだということはおわっているね。またお前もそうしたいのだと思う。しかし奮起して、一生懸命に勉強しようと頑張らなければ、試験はどれも合格する見込みがないだろう。

最終試験は一九一〇年の十二月であり、この王室の子弟の学業にはまったく進歩が見られず、教員たちはそろそろパニックの兆しを見せ始めた。果たして彼を不合格にすることができのだろうか。

かといって彼を合格させ、ダートマスにやる事ができるだろうか。そこではこれまでよりも一層学力が不足し、彼が与えられてきた特別な計らいを、より有能な学生に対しあまりに明白にしてしまうであろう。

「残念ながらアルバート王子が落ちこぼれになったという事実をあなたに隠すことはできません」とオズボーンの教師ワットはバッキンガム宮殿の教師ハンスルに内密に書き送った。「彼は帰省したその興奮でここ二、三日頭がおかしくなっていました。そして不幸なことにその頃が試験期間だったので、今はすっかり打ち拉がれています」実際その通りで、彼の最終的な順位は六十八人中六十八番だったのである。

「もう一年すれば彼にも大きな変化が出てくるでしょう」と偉い先生方は確信というよりむしろ希望として述べた。しかし彼を合格させて、ダートマスにやるにはそれで十分であった。

すぐ上の兄とは対照的に、ハリーはしばらくの間は学業で優秀であった。「彼がここでこんなに良くやっていることは何と素晴らしいことでしょう」とセイント・ピーターズ・コート校の校長は一学期の終わりに報告した。そしてハンスルにはハリー自身が自慢した。「学期末に算数で賞をとるチャンスができたんだ」そして彼はそれをもたらした。ハンスルほどこれを喜んだ者はいなかった。というのも上の二人の少年を学校に入れようとする戦いに敗

れた後、やっと彼は自分の推薦状が正当であることを認められたからであった。

ハリーは物わかりは良くなかったが、バーティーのように忍耐があり、辛抱強かった。またバーティーように健康不良とX字脚に苦しんだ。しかしハリーはこれにへこたれまいと頑張った。家への手紙や記録に彼が流感や、おたふくかぜや百日咳の薬を飲んだ後、ものすごい速さで運動場にもどったと書かれてある。

セイント・ピーターズ・コートでは何度か成績の上下があったが、この場所は彼に合っていて、何人か生涯の友人を得た。ハリーは優しく、寛容な性質の少年であり、一九十二年の夏の学期弟ジョージが到着したことへの反応に、そのことが最も良く表れている。ジョージはハリーよりもほぼ三才ほど年下で、この時期には（混乱を避けるために）リトル・ジョージと呼ばれ、学力的にはすでに上の兄と同じ程度であった。リトル・ジョージが他の兄弟とは対照的に知性に恵まれていたと言うのはあまり立派な褒め言葉ではないが、しかし実際いかなる水準においてもこの四番目の少年はまれに見るほど聡明で、言語と科学に対する鋭敏さの他に、音楽に対する生まれつきの教養と直感を彼がどこで見出したのかは謎である。

ハンスルはだれよりも驚き、呆然としていた。

バッキンガム宮殿



南翼部

一九十二年三月二日

親愛なるグラデイス（姉に宛てて）

ノーナ（彼女の娘で、最高の成績で試験に合格したばかりであつた）の成功を聞いてうれしく思っています。彼女におめでとうと言って下さい。私の教え子たちに彼女ほど反応の良い子がいるといいのですが。彼女は教えがいのある子に違いありません。

こう言つたけれども、ジョージ王子は私の酷評から除外せねばなりません。計算機のボタンのように利発です。有り難いことに、国王陛下が来学期からセイント・ピーターズ・コートでハリー王子と同じクラスになることに同意してくれました。彼がいなくなることは残念ですが、彼にとつてはそれが一番良いでしょう。もし必要であれば、奨学金をもらつてイートン校に入学することもできるのです。

ロンドンの天気はひどいものです。また国王陛下はあの炭鉱のストライキをとても心配しています。残念ですが、炭坑夫は結局根をあげてしまふでしょう。

愛情を込めて弟より

（署名）ヘンリー

こうしてリトル・ジョージは一九十二年四月下旬にセイント・ピーターズ・コートに入学したが、ハリーは夢中になって彼を案内し、他の少年たちに紹介したり、進学校の学生によく行なわれている、軽いいたずらな質の冗談や秘密を教えたりした。すぐにリトル・ジョージは学校に慣れ、彼の魅力と陽気さからたくさんの友人をつくり、学力上の早熟さで教師たちを驚嘆させた。彼らの一人がハンスルに宛ててこう書いている。「ヘンリー王子のクラスでの出来具合から判断して、我々は弟君にあまり期待してはいなかつたのですが、彼は聡明な少年であり、すでに同学年の者たちやお兄様よりも進んでいらつしやることがわかりました。あのようなどても利発な少年を育てたことにお祝いを申し上げます」

これほど立派にしている弟に嫉妬を感じる兄もいるであろう。しかしハリーは寛容な性格から物事をあるがままに受け入れた。彼の尺度により、そしてパーティーの尺度によつてハリーはしっかりと振る舞つた。しかし家からは貴重な励ましをあまり得ることはなかつた。ハリーは競技を好み、ここでもパーティーと同様に、クリケットやラグビーの試合場で注目され、少なくとも自分の心の中では勉強における不足を補うことができると考えた。ク



リケットでは決してスタートの十一人には入らなかったが、一つの試合だけで三人の打者をアウトにし、六十点も得点したことがあった。彼が傲慢そうにこのことを報告した時、父親はどのような六十点のニュースに反応したであろうか。「打球だったらいしたことはないだろうね」と辛辣に言葉を返したのである。

ラグビーは、冬の学期では特に彼のお気に入りとなっていて、十二才の少年がたいていそうするようにとても自然にそれについて家族に手紙で知らせた。明らかにうんざりし、嫌悪を感じて、母親が手紙を書いてよこした。「あなたが書くことは果てしなくラグビーのことだけね。本当にうんざりしています」そして彼が風邪をひいたという手紙をもらって、健康問題にはすぐに退屈するメイはこう書いた。「あなたはいつも何か一つは病気をしているよね。おもしろくない話しただけ」

ハリーの中学生生活は一九一三年の七月二十九日に終わった。その二、三日前に彼は姉に、八十一のアウトを取り、十の捕球をし、二百六十点をとったことを手紙に書いた。

セイント・ピーターズ・コートでしばらく過ごした後、ハリーは最終試験のために冷静になっていた。ハンスルへの最近の手紙で、校長は次のように書いてきた。「彼はずいぶんと進歩しました。私は彼のことがとても好きになりました（その後もそれは続いたが）。楽しむことに愛着を失うことなく、彼は真面目さと思慮深さにおいてとても成長しました。皆彼のことを愛して

います」

これは確かに本当であった。少年期と同様、成人してからもハリーは決して敵をつくらなかったとはつきりと言うことができる。彼は仲間うちで最も頭が良いということはなかったけれども、彼を嫌になることは難しいことであった。

一九一三年九月にハリーはイートンに入学していた。そして多くの点でサミュエル・ラバック氏の寮が最も過ごしやすいと彼は判断した。ハリーは初めはまさにバーティの弟のように見え、「落着きのなさ」と無頓着が交互に現われる」という知らせがあった。学部長のジョージ・リトルトンはまだ彼の「時々止まらなくなつて、注意力が一時的に散漫になるほどのクスクス笑いに気づいた。

しかしイートンは間違いなくハリーにとって相応しい場所であり、リトルトンとラバックは彼の進歩について総体的に良い評価を与えた。しかし両親は彼の成績に満足しなかった。他の教育機関が施す、より厳格な教育よりも、むしろこの私立学校が与えてくれる相対的に優しい処遇を、ジョージとメイが三番目の息子に許可した訳だが、彼が成し遂げた成績や進歩を彼らが軽蔑するのは、典型的とはいえ、おかしな矛盾である。両親はほとんどどんな状況でも批判し合っていた。多くの人たちが、しばしば上の兄弟の写真を欲しがるように、彼の写真も欲しがった。母親はデヴィッドとバーティにはただで写真を与えていたが、ハリー

には一枚一シリングするのだと言い渡した。そして彼にその持ち合わせがあるはずもなかった。メイはどのように彼がお金を使うのか訝しく思っていた。「というのもアツという間に彼がお金を使ってしまうように思えたからなのである」

ハリーはこういった細かな、ほとんど止むことのないいやがらせをもつとせず、陽気に振る舞っていた。イートンでは初めから楽しく過ごし、デヴィッドをオックスフォードに訪ねてから、彼は自分も大学に行く希望を抱き始めた。

## 3

デヴィッドとオックスフォードは相反するように見えるであろうし、確かにハリーの長兄は自ら選んで大学に來たわけではなかった。実際彼の愛すべき祖父エドワード七世の死後、デヴィッドは彼のやりたいと思っていたことのほとんどすべてにおいて不満を感じていた。ダートマスで最後の学期を終えるとすぐに、彼と彼の仲間の学生たちは最終訓練の巡航に参加することになっていた。その後で彼らは卒業し、自動的に海軍士官候補生の短剣と白いワッペンを身につける資格が与えられるのである。

デヴィッドは記している。「私ほどこの成功の証しとなるものを欲しがっていた学生はいないであろう。しかし何の前触れもなく、父からことの次第を説明する手紙が届いた。私は当然六月の

戴冠式で重要な役割をしなければならないので、私の希望をかなえる、北アメリカへの訓練航行を見合わせなければならないというのだ」

ということ、大西洋航海の楽しみを友人たちと屈託なく分かち合うことができず、父親の戴冠式に華美で、馬鹿げた服装を着るという恥ずかしい思いをするとは！ 戴冠式の日、デヴィッドはともあれ士官候補生の位を授けられたが、彼はほとんど満足しなかった。というのは彼にも、また他の誰にでも、彼が実際にこの資格を得たのではないということは明白だったからである。それから皇太子としての叙任があった。「こういったことがすべて終わった時、私は自分自身についてつらい発見をした。私がこの虚飾と儀式における役割を果たす心づもりをしている間、私は、私を敬意を必要とする人間として扱う傾向のあるすべてのものを避けていたのであった」とデヴィッドは書いている。

そして新しい責任と義務からの短い猶予があり、ついに彼は出航することになったのである。

父親がデヴィッドを、ヘンリー・ハーヴィー・キャンベル大佐が指揮をとるヒンドウスタン号に乗船できるよう取り計らってくれた。父の古い友人で、同じ船に乗っていたのだが、キャンベル大佐はヨーク邸に王室の家族をしばしば訪ね、子供たちとも友達になっていた。デヴィッドが何ら特別な優遇を受けないというこ

と（勿論国王の要請なのだが）を保証するという大佐の決意から、デヴィッドは非常にきつい仕事をさせられた。「甲板の上に立つキャンベル大佐が、ヨーク邸の優しい客であった時とはまったく別人であると感じてしまった」とふさいだ気持ちでデヴィッドは記している。

息子のジョージと嫁の戴冠式の四日前、アレグザンドラ王妃は孫のデヴィッド、バーティー、メアリー、ハリー、そしてジョージが大人の付き添いもなく、同じ馬車に乗って一緒にやって来るということを知った。彼女のうれしそうな高笑い、彼女付きの女官が刺繍仕事から目を上げて、何がそれほどおかしいのか尋ねた。

「あなた、考えてごらんさい。ジョージの子供たちが皆同じ馬車で来るのよ。大騒ぎで大混乱になるわね。ミュージック・ホールのどたばた喜劇のようでしょう。ひどいやんちゃですもの」

「それでは国王様にお話しした方がよろしいのではないでしうか」トレッドゴールド夫人はまじめに尋ねた。

「いいえ、素晴らしいことになるわ」

確かにその通りになった。

デヴィッドとメアリーは天蓋を開いた馬車の後部座席という名誉ある場所を与えられた。デヴィッドはガーター勲位の服装とマ

ントを着け、冠を被っている。メアリーは白テンの裾のついた、薄い青のビロードのマントと冠を身に付けていた。バーティー、ハリー、リトル・ジョージは向かい側に腰掛けていたが、お行儀を良くし、デヴィッドの言う通りにするようにという厳しい命令があった。（ジョンは離れたところから見物するしかなく、ラーラと一緒に宮殿の壁ごしにじっと見ていた）

「ジョージのペットたち」は、宮殿からウエストミンスター修道院への沿道に群がる群衆から、両親たち以上に大きな歓迎を受けた。そして五人とも教えられたようにそれに答え、道中ずっと微笑み、手を振っていたのである。デヴィッドでさえも（彼の「馬鹿げた」服装にもかかわらず）この役割を大いに楽しんだことを認めなければならなかった。

儀式はたいへん時間がかかり、特に下の子供たちにとっては非常に退屈であった。天蓋を開いたランドー馬車にもどるまでずっと、彼らはそわそわし、スチームを焚いてほしいと思っていた。鐘が鳴り、馬はスピードを増して、大観衆の声援が修道院のまわりから湧き上がり、ハリーとバーティーは、彼らが押しつぶされるのではないかと判断し、リトル・ジョージを座席の下に押し込めようとした。実際は下の弟は八才でもはや「リトル」ではなく、この屈辱に抵抗していたのだが、一方その時彼らが通過しようとしていたその群衆がこの予期せぬ場面に突如大笑いをした。

デヴィッドとメアリーは初め気がつかぬふりをし、「立派な態

度で振る舞っていた」メアリーの伝記作者はこう書いている。

王女は事態が悪化したことで、まもなくひどく気分を害して、腕白な弟たちを厳しく諫めた。しかし彼女の言葉はまったく聞こえていないようで、今にもこの手に負えない三人が馬車の床の上に折り重なるのははや明らかだった。

ついに王女は前に手を伸ばし、彼らを強く引き離して、座席にしっかりと座らせた。彼女はそうすることで、冠をなくしてしまっただけで、驚くことはなかった。皇太子がそれを拾い上げて、彼女は落ち着いてそれを頭に載せた。そうして五人はその後のパレードをとて仲良く進んでいった。

アレグザンドラ王妃は、子供たちがやらかすであろうと彼女が預期していた愉快な騒ぎやいたずらを見逃してしまった。しかし彼女はそれについて（ジョージとメイには内緒にであったが）サンドリンガムで聞き、大笑いをしながら、満足するまで二度も知らせの者にその成り行きを詳細に繰り返すよう頼んだのだった。

「ジョージのペットたち」の下から二番目の弟と長兄の間に特別な関係が生まれていた。弟ジョージはかつてこう思い出している。

デヴィッドと一緒に本邸まで通った時ほど楽しいことはな

かった。デヴィッドは私より八才半年長だったが、私たちはとてもうまくいっていた。彼は私に何でも話してくれたものだ。彼は航海の経験を終え、オックスフォードが、水平線にかかる暗雲のように彼の心に重くのしかかっていた。そんな間にも私たちはヨーク邸ですてきな冬を一緒に過ごしたのだった。

両親はデリーでの戴冠式の公式会見という、とても重大な仕事のためにインドへ出かけていた。パーティーは海軍の指令でいかなかった。ハリーは学校にいて、ヨーク邸に残っているのはハンスルとフィンチの二人に、デヴィッド、メアリー、そして私である。メアリーには主にフランス語とドイツ語の授業が少しあったが、私の記憶しているところでは、ほとんどの時間を乗馬をして過ごしていた。私は午前中は勉強部屋にいらなくてはならなかったが、本当に自由で、安逸な時間だった。私たち皆が、両親がいないことでとてもくつろいでいたのを思い出し、恥ずかしく思う。ハンスルとフィンチもいつもと違っているのがわかった。屋敷の出入りが自由だったばかりでなく、両親と不意に出くわす恐れもなかった。

十二月十四日、ノーフォーク州北部は雨が降り、寒い日であった。メアリーは乗馬ができず、その日の狩りは中止となった。しかし日が暮れかかる少し前、午後四時頃に、空が突然晴れわたり、西

に沈みかけた太陽が、最後に消えていく前の短い輝きを放っていた。キングス・リンの方角にある野原や森林の上には緋色の空が広がっていた。

母親の居間にある小さな掛け時計が四つチャイムを鳴らした時、二人の少年は本を読んでいた椅子から立ち上がった。「行く時間だよ」とデヴィッド。急ぎの用件ではなかったが、彼らの祖母が待っていて、デヴィッドもジョージも彼女を失望させたくはなかった。その上ジョージが言うことには、「本邸はいつも楽しい」のであった。

フィンチは二人がコートを着る手伝いをした。「風邪をおひきにならないよう気をつけてください」と広間で彼らに言った。デヴィッドが笑いながら、「大丈夫、僕たちの子守をしないと約束するからね。もう大人なんだから」と答えた。

本邸への道を辿るにはまだ十分明るかったが、いずれにしても彼らはその短い散歩を目隠しでもできるであろう。外灯が点いていたが、アレグザンドラ王妃がいやいやながら電灯を取り付けるのを許可したので一層輝くようになった。二人が砂利を敷きつめた私設車道をザクザク音を立てて横切った時、高い窓のカーテンは引かれていた。

彼らが玄関に入った時、正面の扉が開き、サンダースが笑顔と軽い会釈で迎えてくれた。「今晚は、お坊ちゃま方。ひどい日でございましたね」

「まったくその通りだよ、サンダース」と執事にコートをとらせようと背を向けながらデヴィッドが言った。「王妃様があまり気分を損ねていないといいのだけれど」

「そうなるにはもつと雨が降りませんと」

アレグザンドラ王妃は、「ずっと気持ちがいいのよ」と王妃が言う小さな応接間の、炎を上げる暖炉の前でいつもの椅子に腰掛けていた。彼女の前には、ジグソー・パズルのピースが散らばった、象眼のある四角いテーブルがあり、そのパズルはわずかしかはめられていなかった。彼女は丈の長い、茶のビロードのアフタヌーン・ドレスを背中で止めて、新しい「ストンとした」形を強調していた。髪の毛はいつものように高く結い上げてあり、手の込んだイヤリングにはダイヤモンドがキラキラ光って、ルビーが二連になったお気に入りのネックレスをしていた。誕生日を二週間前に迎えたばかりで、彼女は六十七才になっており、彼女がデマークからやって来て、グレイブセンドのフィアンセに抱かれ、皇太子妃となって四十八年にもなる。その時プロシアの皇太子妃は未来の義理の妹を次のように描いている。

彼女は私よりもずっと背が高く、たいへん痩せてはいたが、愛らしい容姿をしていて、顔色はこの上なく良かった。素晴らしく整った白い歯、そしてきわめて美しく、はっきりとした眉毛。形の良い、ほっそりして、少し尖った鼻、彼女の

顔は全体がほっそりしていた。額も狭かったが、形が良くて、決して平たくはなかった。彼女の声、歩き方、身のこなし、動作は完璧で、私がかつて会った中でも最も貴婦人らしく、貴族的に見える一人であった。

今も老婦人としては、彼女の肌はまだつやつやして、「エナメルのようにあり」、深い青い目の輝きには決して曇りがなかった。「あら、二人とも、来てくれてとてもうれしいわ。手伝ってくれないかしら、年とった頭には難しすぎて」と二人の孫に挨拶した。

テーブルが一層良く見えるように、王妃の右側の背もたれのまっすぐな椅子に、老齢の婦人が腰掛けていた。白髪で、ひどい皺があり、指にはルビー、ダイヤモンド、サファイヤがずっしりとはめられている。彼女は、故エドワード七世の秘書であったノールズ卿の妹、シャーロット・ノールズ夫人であり、約五十年の間、一度も途切れることなく、「最愛のアリックス」の世話に彼女の成人してからの人生をほとんど捧げてきた、離れがたい話し相手、最も親しい友人であった。

彼女の隣にはほぼ同じ年ごろで、高貴な物腰の、もう一人の老夫人が腰掛けていた。背が高く、グレーの髪の毛をして、はつきりした顔立ちであり、特に鼻が鷹のような形をしている。彼女はジグソー・パズルの進み具合には無関心であるように見え、少年たちの挨拶に軽く首を傾げて答えた。王妃は彼女をルイーズと

呼んでいた。「ルイーズ、よくご覧なさい・・・」というように。実際のところ、彼女はバクルー公爵夫人、ルイーズ・ジェーン・ハミルトンであり、王妃の衣装責任者であった。

それから大柄で、恐ろしい体躯をしたダイトン・プロービン卿がいた。彼はたつぷりとした鉄灰色の髪の毛と、胸の下まで届く、流れるような白い顎髭をしていた。彼は、少年たちの祖父が彼らに何度も語ったインド内乱の活躍でヴィクトリア十字勲章を獲得し、エドワード王自身の槍騎兵团、そう言ってよければ「プロービン騎兵隊」を形成した。彼はおよそ八十年に及ぶその生涯で、まさに一度も恐れを経験したことがない男だった。

王妃は彼を愛し、彼に頼るところがあった。というのは彼女の監査官として、彼はいく分、金銭と出費における彼女の極端に浪費的な考え方を共有していたからである。「あのお二人のおかげで我々は家事仕事をせねばなくなるだろう」と父親が困り切って、叫んでいるのをデヴィッドはかつて聞いたことがあった。年をとってしまったとはいえ、この恐ろしい人物が今は、暖炉に背を向けて、まるで戦略を練る将軍のようにテーブルのジグソー・パズルを眺めていた。「君たち、困った戦況になってしまったね」と彼はデヴィッドとジョージに挨拶した。「軍備補強して、側面から攻めた方がいいようだ」

応接間にいるもう一人の人物は小別邸からの客であり、可愛らしく、金髪で、デヴィッドに似ていなくもない少年であった。彼



は三才のようにしか見えなかったが、実際は六才半である。それは少年たちの末弟のジョンであり、お祖母様の膝に座って、彼女のネックレスに注意を傾けていた。デヴィッドの声を聞くと、ゆつくりと振り向き、につこり笑って、上下に体をゆすった。そしてジグソーの一片をつまんで、アリックスが制止する前に、歓待して、それを床に放り投げた。

「ほら、可愛いジョニーはあなた方に会うといつても上機嫌なですよ。一緒に遊びたいのでしょうけれど、お風呂に入る時間だよ」

その時ラーラ・ビルの大柄な姿が扉のところに現れたが、メアリーも一緒だった。ラーラは、デヴィッドとジョージがものごころがつく頃から屋敷内で着ている、のりのきいた白い制服を身につけていた。彼女は一堂に膝を折ってお辞儀をし、年長の二人の少年に微笑んだ。「ハリー王子様が明日学校から帰っていらつしゃると聞きました。それならばすぐにもクリスマスになりますよ。そうですね、お坊ちゃま」と言つて、ラーラはジョンに手を伸ばし、しっかりと腕で王妃の膝から彼を抱き上げた。「ありがとうございます。フィンチが広間にクリスマス・ツリーを飾ることでしよう。その天辺にあなた様をお乗せしなくては。可愛い天使様」ラーラはジョンを胸に抱き、彼は、まるで彼女が危険な、訳のわからない人生で唯一の安全な岩であるかのように彼女の首に腕をまわした。

「おやすみ、ラーラ」とジョージが声をかけた。「お前にプレゼ

ントがあるんだ。気に入ってくれるといいけど。メアリーもそうだよ」

それはサンドリンガムの本邸での典型的な冬の晩なのであった。將軍はサイド・テーブルのそばの椅子にギシギシ音をたてて座り込み、とてもゆつくりとジョージを相手にダブル・ペイシエンスを始めて、(まったく十分なのだが) 照明に不平を言った。しかし敗けた時は潔く降参したのだった。「老いぼれたこの頭には手強すぎたようだ」デヴィッドはしばらくの間ジグソー・パズルに専念していたが、それから祖母に両親がどうしているかを尋ねた。「一番最近の電報は昨日の日付になっていて、それはダーバーの日ということね。そしてそれは火曜日だよ。明日お父様はインドの新しい首都の礎石を据えることになっているのよ」王妃は別の一片をはめ込み、両手をたたいた。「皆によろしくと言っているわ」

紅茶とバスケットが運ばれてゲームは中断し、デヴィッドがまだクリスマスプレゼントを何も買っていないと白状した時、からかうような笑いがあつた。それからマージャンの台が運び込まれ、やがて王妃のかなり退屈で、威張つたような姉のロシア皇太后が加わった。彼女は戴冠式の後、歓迎される時期を過ぎても、長い間滞在していたのだった。

七時十五分まではいつものように楽しいひと時であり、それから大人たちは晩餐のために着替えをするため退出せねばならな

かった。そして少年たちは夕食をしに別邸に帰らなければならぬ。「あなた方は馬車で行かなくてはなりませんよ」とアリックスが言うと、「でもお祖母様、ほんの・・・」合図をして、王妃がお話しになった。御者が起こされて、馬には馬具がつけられる。外灯が灯され、十分後にはデヴィッドとジョージはボストン老人に詫言を言つて、短い時間、寒い車道を走るため馬車に乗り込んだ。

## 4

翌朝、ルイーザ・バクルー公爵夫人がその同じ道をボストン老人と共にやって来たが、今度その馬車はヨーク邸を過ぎ去り、門番小屋のそばを走り抜け、駅へと向かった。この衣装係担当夫人はドラムランリッグへの長い帰途につこうとしていた。

長い間バクルー家のスコットランドでの邸宅となっていた、ダムフリースシアにあるドラムランリッグ城はピンクの花崗岩でできた、壮麗で完璧な釣り合いのとれた建築物であり、雨の後太陽がその雲母の斑点を浮かび上げらせ、お伽話しのお城のように輝かせるのであった。それぞれの隅にある塔の中には、子供たちの幽霊の話にはうつつつけの、暗く、曲がりくねった階段があり、一方それとは対照的に中心となる居城の居間からは美しい庭園や、様々な形をした花壇、箱形の生垣、砂利道を眺めることができた。

公園がニス河まで広がっていて、そのずっと向こうに荒れ地が丘のようになつて、空と接している。その土地は五十万エーカーほどの面積があり、その居城はサンドリンガムを山小屋のようにみせるのである。

ルイーザの夫は黒い目、黒い髪、低い声という粗野なスコットランドの地主の一般的なイメージをほとんど戯画化したような人物で、節くれだった大男であった。彼はまたひどくざつくりしたツイードと重いブーツでそれを演出した。しかし彼は愛情深い心と優しく、人をもてなす性質をもっていた。莫大な財産と所有地で、彼は訪問客にすべてを提供することができ、また寛大にそれを行なった。彼は何よりも、たくさんの親類や友人が彼のまわりで狩猟をしたり、遊んだりしていることを好み、それも彼らが若ければ若いほど、良いのであった。

さて、一九十一年のクリスマスが近づいたので、客人らが催しのためそれぞれの家に帰る前に、夫のウィリアムがドラムランリッグで客人をもてなすのを手伝うため、公爵夫人は城に向かっていた。荒れ地では狼が随分と行なわれるであろうし、晩になれば城内に若者や地位の高い人々の声や笑いが響くであろう。

年少の者の中には公爵夫妻の孫娘、アリス・スコット嬢がいたが、彼女はいずれバクルー家と王家を一層固く結びつけるであろう。またその後かなりたつて、老夫人になった時には、ドラムランリッグでの無垢な時代を書き綴り、毎日がチャペルでの祈りか

ら始まり、スミス・ドリアン尊師が住み込みの司祭として式を行なっていたことを回想している。

三年後には老公爵が癌で亡くなり、アリスの父が平和な夏の終わりに称号を継承した。一九十四年の夏は今日生きている者すべてにその記憶をよみがえらせる。アリス・スコットは、特に滞在しにやって来たたくさんの素敵な人々を憶えている。彼らの多くは、その時オックスフォードに在学していたアリスの兄、ウォルターの友人であった。セルビアのパウル王子、フォン・バイバーシュタイン伯爵、「ボブティー」・克蘭ボーン、ボウズ・ライアン兄妹、そして他にもたくさんいた。マイクとローズのボウズ・ライアン兄妹は彼女のお気に入り、その妹のエリザベスも特別な計らいでその場に居合わせた、温室のズバイモモのように匂いやかで、南に面した壁の桃のような顔色をして、夏の空のような青い目をしていた。エリザベスはほぼ十四才で、アリスよりも年長だった。巻き毛の黒い髪と絶やさない微笑み、そして魅力的に首を傾げるところがあった。彼女は荒々しい遊びには容易に加わらなかった。けれども、鞍に乗ってしまうと少女らしい恐怖は微塵もなくなつて、自信と技量をもって元氣のいい小馬を乗りこなしていた。

「グラームズはどんな感じ？ 幽霊でいっぱいなの？ グラームズはお化けや幽霊がたくさんいて、スコットランドで一番の幽霊城だとパパが言ってるわ」とアリスはエリザベスに彼女の家に

ついて尋ねた。

エリザベス・ボウズ・ライアンはウィンザー家の少年の一人と結婚することが一番に決まっており、アリス・モンタギュー・ダグラス・スコットをよそよそしく見ていた。そのアリスはいつかその少年たちの別の一人と結婚することになるのだが、エリザベスは軽蔑的な声で言った。「いいえ、幽霊やそのような馬鹿げたものなんかありはしないわ。グラームズはとてもよい所よ。愛らしいチャーリー公も一度お泊りになったこともあるわ。あなたのご先祖のウォルター・スコット卿だって」

「とてもよい所」というのが、ストラスマア伯爵夫妻の末娘、美しいエリザベスによる、スコットランドの城の中で最も広大な、堅牢なものの一つであるグラームズの定義なのであった。

一九十四年にそこがよい所だと言えたとしても、ジェイムズ五世が王位のためにグラームズ未亡人を追い出し、彼女をエジンバラで魔女として火刑に処して、その城を取りもどした時はそうではなかった。それからその血筋にいる気の狂った息子が、一七〇七年に、父親が不在の折り、逃げだして、厨房に降りて行ったことがあったが、そこでは一人の少年が焼肉の串を回していた。父親が帰宅した時は、その少年が串に刺され、息子がそれを回していたのだった。

この話しや過去における他の血も永るような話しは、最初の居

城がグラームズ城であつた、地位も高く、優しいボウズ・ライアン夫妻とはかけ離れたものである。つまりそれはクロード・ジョージ・ボウズ・ライアンと彼の妻セシリアであり、彼にはストラスモア・キングホーン伯爵、リヨン子爵、グラームズ男爵、ターナダイー、シドロ、ストラスディクティ、ボウズ・オブリストレット・カーズル男爵等といった称号や名前がある。彼女の方はこの時までに六人の丈夫な息子たちと、四人の娘たち（ヴァイオレットは十一才で死んだが）を生み、エリザベスはその末の娘なのであつた。

この上品で、洗練された家族での唯一荒々しいこととの関わり合いは、軍隊だけであり、父親は近衛騎兵に参加したことがあつて、息子のファergusはスコットランド高地連隊に従軍していた。そして勿論狩猟と釣りである。エリザベスは特に蚊ばり釣りに早い頃からすぐに興味をもった。まさしくボウズ・ライアン一家はまったく見苦しくない人々であり、彼らの生活様式は決してスコットランド風というこだわりがなく、気取つてもいず、そのままイングランドのロンドン周辺における中流家庭の上の階層に現れても、その身分以上には見られないであろうし、そこでも彼らは十分快適に過ごせることだろう。

同時代のある人物が語っているのだが、「ボウズ・ライアン家についてまず言えることは、彼らが身分ということについて一切意識してはいず、彼らの責任をととても重要に感じているという

ことである。家族以外には話されることもなく、内輪でもめつたに口にはされなかったが、彼らは、サザーランド家とバクルー家、そしてスコットランドの中でも莫大な財産家であり、広大な土地の所有者の何人かを、その富裕さにおいて、少しばかりこれ見よがしであり、彼らがあちらこちらにしばしば居を移すことを少々下世話であると思做していた。アルフレッドと二ナのダグラス・ハミルトン夫妻のように、ストラスモア一家はつき合いを避ける傾向があり、あのスコットランド人の愛国主義をやや『古臭い』と考え、まったく申し分ないのであるが、英国王室をまったく外国のものであり、それもドイツ的であるにとらえていた」

ストラスモア家のロンドンの邸宅は、小塔の多いグラームズよりも的確に彼らの生活様式を反映し、ホワイトホールにあるバクルー家のモンタギュー邸と強い対照をなしている。セイント・ジェイムズ・スクエア二十番地は比較的最近手に入れたもので、ピカデリーから数百メートル離れたところ、クラブ地区の最も中心部にあり、それ自体相当な大きさの庭がついていたが、同様に便利な馬屋の設備と、乳母や子供たちには街の公園が使えるのであつた。それは一七七一年に建てられた、アダム荘というものであつたが、アダム式の天井と、スイスの画家、アンジェリカ・カウフマン（一七四一―一八〇七年）によつて装飾された応接間、美しく幅の広い階段が設えてあつた。

セイント・ジェイムズ・スクエアは、ボウズ・ライアン家に

とつて一年の大半を過ごす屋敷となっていたが、ハートフォードシャーにある、すべて赤いレンガ造りで、手入れの行き届いた庭園のついた、セイント・ポールズ・ウォルデン・ベリーがエリザベスと弟のデヴィッドの最も鮮明に憶えている屋敷であった。デヴィッドはエリザベスよりほぼ二十年下で、姉を偶像化していたが、彼女はその愛情に精一杯報いていた。ヤコブとレアの末の子供二人にちなんで、「ベンジャミン姉弟」、または「ベンジャミナ」と母親は呼んでいたが、彼らの乳母クレア・クーパー・ナイト、通称「アラ」の保護の下で、彼らはいつも一緒、もしくはそのように見えた。

一九〇五年の秋もまだ早いある日、一台の馬車がロンドンの彼らの屋敷の前に止まったが、その中には二つの大きなトランクと若いフランス人女性、ラング嬢の姿が見えた。彼女は「ベンジャミン姉弟」の家庭教師に任命されていたのだが、その小柄な体つきと自分自身に対する謙虚な考えに比して、子供たちには多大な影響を与えることになる。パリの向こう側からの長く、いく分退屈な旅の後、ホールで教え子の一人に出迎えられて彼女は驚いた。後に彼女はこの出会いについて語っている。「彼女は小さな手足をし、バラの花びらのような顔色をした、美しい子供であったことを憶えている。手を伸ばしながら私の方に進み出て、丁寧な五才の話しぶりで、『ここを気に入って下さるといいのですけれど』と言ったのだった」

これはエリザベス・ボウズ・ライアンの早熟さとまったくの自意識のなさに関する、ラング嬢の早い時期の証言であり、彼女はよちよち歩きをしている頃から完璧な女主人であったのだ。

私はそのように優れた子供に会ったことはなかった。彼女は反対に私にお話しを読んでもくれたのである。また頭の良い十才の子供のように、聖書の詩篇や一節、そして詩を暗唱したのだった。他に何を彼女に教えることがあるのだろうか。実際にはフランス語を含め、たくさんあったのだが、彼女はすでに少しは話していたのである。並み外れた子供であった。

デヴィッドが「マドモワゼル」と発音するのが難しいとわかった時、エリザベスは「マデ」の方が彼には言いやすいと判断し、私がストラスモア御夫妻のために働いている時はいつも、子供たちがそのように私のことを呼んでいた。

エリザベスは快活さに溢れ、性格に対照性があり、ある時には大人のような、采配をふるう威厳のある女主人であるかと思うと、次の瞬間には六才の子供らしく、ペットやデヴィッドと遊んでいるのであった。私が働き始めた直後の彼女について、逸話をたくさん憶えている。女性の手相見が出席しているガーデン・パーティーがあったのだが、エリザベスは躊躇せずにテントの中へずんずん歩いて行って、彼女の手相を見るように言ったのである。彼女が出て来ると、私



は尋ねた。「彼女は何と言ったの？」彼女はしかめ面をした。「まったく彼女はおかしいわ。私が大きくなったらいつか女王様になると言ったのよ」私は笑って、「ではあなたのためには法律を変えなくてはだめね」と言ったものだ。「誰が女王様になりたいと思うのかしら」と彼女は私の得意な童謡の一つ、「花開く時、私は女王様になる」を歌い、それに合わせて踊り始めるのだった。その頃から彼女は学校に通い始めた。

セシリア・ストラスマアは教育に対する考えを改め、飛び抜けて賢い末娘はその知力のレベルに合った教育を受けなければならぬと判断した。マデが到着した時、ドアを開いたその子供がすむことができたのはこの母親のおかげである。十才年上の姉のローズはこのように書いている。

ストラスマア夫人はまさにあらゆる点で「彼女を躱けた」のでした。デヴィッドが書いたように、「母は私たちに読み書きを教えてくれた。それぞれ六才と七才の時に、私たちは聖書のすべての物語りについてかなり詳しい要約を書くほどになつていた。これはまったく母の教えのたまものである。母はまた初歩的な音楽、ダンス、絵画を手ほどきしてくれて、そのすべてに姉はかなりの才能を示したのである」

デヴィッドはまた母親がエリザベスをしかる時の態度について、次の逸話を繰り返したものだ。

エリザベスは末の娘なので、母にとつてはかけがえない存在であった。彼女はとても可愛らしかったので、旧友の一人が母に「エリザベスをしかる時、あなたはどうするの」と尋ねた。母は言ったのである。「ただたいへん悲しそうに『エリザベス！』といえれば十分なのよ。そうすると彼女はうなだれて、すまないと思うのよ」確かに本当のことだ。私自身母がそう言うのを聞いたことがある。父も彼女を可愛がつていたが、彼女を躱けたのはまさしく母なのである。

ロンドンに在る間、エリザベスは特別な教師の下でダンスと音楽の練習をしていた。そして一九〇九年、彼女が八才の時、家庭教師による授業の補足として、マラバン・ハイ・ストリートにあるフラーバル通学学校に二学期間通うことにセシリアは決定した。セシリアは、校長のコンスタンス・ゴフ夫人からエリザベスの進捗についての報告を毎週もらえらるるよう要請した。それから「家庭訪問」である。九才のエリザベスは、ゴフ夫人がストラスマア夫人とこの学童の進歩について話し合うために、彼女と一緒に馬車でセイント・ジェイムズ・スクエアまでやって来ることを聞かされていなかった。



エリザベスが駆け出して行って、御者に迎えられ、（まるでその必要があるかのように）馬車に乗せてもらった時、彼女はゴフ夫人がすでに席の一つにおさまっているのがわかった。ゴフ夫人は笑って挨拶した。「馬車を一緒に一緒にしてよろしいかしら」

「ええ、喜んで、ゴフ先生」エリザベスはすぐに返答した。「母を訪ねるのですか」「そうなのよ。ちょっとおしゃべりをしたくて」

最新の秋のファッションを眺めたり、買ったりしている立派な女性たちで賑やかなボンド街を、馬がパカパカ音をたてながら走っている時、エリザベスは言った。「先生と母がお話しになりたいことは一つしかありませんわ。それは私のことです」彼女は隣にいるゴフ夫人の方に振り向き、愛らしく微笑んで、それから笑った。「そうじゃありませんこと？」

「ええ、勿論。あなたの言う通りよ」

それからエリザベスはくだけた調子で尋ねた。「この秋の高くなった裾をどうお思いになります、ゴフ先生」

そして彼女らはピカデリー、ジャーミン街、セイント・ジェイムズ・スクエアと道中ずつと女性ファッションについて話していた。二十番地で彼女らは執事に出迎えられ、彼はすぐ校長先生に伝えた。「校長先生、たいへん申し訳ありません。ストラスモア夫人は帰るのが遅れているのでございます。できるだけ早く帰宅するとあなた様に伝えるよう言われましたもので」

このことを耳にして、エリザベスは素早く指図をし、執事が彼女とゴフ夫人のコートをとるやいなや、先生を正面の応接間に案内して、彼女を暖炉のそばに掛けさせた。「ずいぶん気の早いことはわかっていますけど、暖炉の火は部屋を明るくしますものね」と言って、呼び鈴を鳴らし、召し使いにお茶を頼んだ。「スコーンにたっぷりクリームをのせるようにマンダーズさんに言っておね」という言葉が、この代理女主人の年齢を思い出させる唯一のことであった。ゴフ夫人は自分の役割を完璧に演じ、会話が続いている間は一度も甘い笑顔をみせはしなかった。エリザベスはお茶を注ぎ、ゴフ夫人の訪問の目的について話し始めた。「ゴフ先生、母は不本意ながら遅れているようですが、本当に申し訳なく思っているに違いありません。ですから私に成績のことをお話し下さればと思います。努力が必要な、いかなる悪いところも躊躇なくおっしゃって下さいませんか。あなたのおっしゃることをすべてその通りに報告しますことをお約束致しますから」と彼女は企むような笑いを浮かべた。

この時点でストラスモア夫人が部屋に入ってきた。「まあ、ゴフ先生、本当に申し訳ありません……。エリザベスがあなたのお相手をしていただけですね。なかなかの王女様ぶり……」

この時からエリザベス自身によって熱心に用いられ、彼女は家族の中で「王女様」と呼ばれるようになった。

グラームズ城の北と西にはグランピアン山脈が、重苦しい夏の

天候では暗く、低く、ぼんやりと姿を現わし、冬の陽光の中では雪で白く斑になっていた。それはアペニン山脈が聳え立って、イタリアの継目となるように、スコットランドを二つに分断していた。グラームズからは百マイル、グランピアン山脈のはるか西側、そしてビデアン・ナム・ピアンの巨大な山頂の下にグレンコーがあるのだ。

ラング嬢は、ストラスモア家との仕事を始める前に、先を読んで賢くもスコットランドの歴史を少しかじっていたが、半ば彼女自身の好奇心を満足させ、また教え子の歴史に現実性を与えるためにも、セシリアにエリザベスとデヴィッドを、一六九二年の恐ろしい虐殺の起こった谷と土地を見に連れて行くことを提案した。

この旅行は綿密な計画の後、一九十四年のイースターの直前に実行されたが、その時谷間にはたくさん雪だまりがあった。二人の若いボウズ・ライアン姉弟はこの日と、マクドナルド家に対する、代々の敵であるキャンベル家による悪辣な殺戮の生き生きとしたマデの説明を決して忘れなかった。数週間後エリザベスは、グレンコーで一日と彼女が見たすべてのことで頭が一杯になり、ドラムランリッグにいるスコットランドの目上の子供たちにまったく嫌気がさしていた。彼らは皆その谷を見ていたし、学校でその歴史を以前に何度も聞いていたのであった。

## 5

三千マイルも離れた、その春の嵐でひどく波の高くなった大西洋の向こうでなら、ある一人の子供がこの「王女様」の話をもっと熱心に聞いたであろう。なぜなら彼女はその時ウォルター・スコット卿の小説に心酔し、スコットランドの谷にちなんだグレンコーという町の小学校に通っていたのだから。

その学校はオールドフィールズといい、所在地は単にアメリカ・メアリーランド州、グレンコーであった。それはマラバン・ハイ・ストリートにあるエリザベスの学校のように立派なものであり、四十人の女子生徒がいたが、決してフラバーの教育方針で経営されてはいなかった。アンナ・G・マカロウは兄弟と一緒に学校を経営していたが、彼女がフラバーについて聞いたことがないのは確かであった。けれどもスコットランドのグレンコーについては十分承知していたし、またスコットランドの歴史についてはストラスモア家やバクルー家の人々よりも詳しかった。

オールドフィールズは郷紳の娘たちのために伝統的な方針を行なっていて、「優しさと礼儀正しさ」が教師と生徒の行ないを支配していて、「優しさと礼儀正しさが常に女性から求められる」と書いた掲示がどの出入口にも貼られてあった。試合のチーム名さえジェントルネス・アンド・カーティシーであったが、他のバスケット・ボールのチームと同様に、オールドフィールズでも実

際には突き倒しやひっかけがかなり見られた。

「王女様」のエリザベス・ボウズリライアンがグレンコーを訪れているその時に、ウォルター・スコットの小説に夢中になっていたオールドフィールズのこの生徒はベシー・ウォリス・ウォーフィールドといい、溺愛する母親によつて時々「公爵夫人」と呼ばれていたものだが、グレンコーのオールドフィールズに愛着をもっていた。彼女の父、ウォリス・ウォーフィールドは、ベシー・ウォリスがまだ幼少の頃、結核で亡くなっていた。校長は少女たちに「ナン先生」と呼ばれていたが、ベシー・ウォリスは後に彼女について書き記している。「彼女は六十二才で、背が高く、痩せていて、言動が正確であった。そのシルバー・グレーの髪は毛はきつちりとポンパドゥール型に結い上げられていた。また彼女は必ず小さな、白い折り衿のついた黒いドレスを身につけていたものだ」

また学校についてはこう書いている。

エチケットと振る舞いにおける規律を重視すると共に、オールドフィールズはまた神に対する畏敬の念を吹き込もうとした。毎朝起床のベルと朝食の間に、学校での祈祷が五分間行なわれ、それは英国教会派の祈祷書に従っていた。お祈りが食事の前に唱えられ、晩には学習用ホールで賛美歌を歌った。日曜の朝には教会に行く前に、それぞれがその日の祈祷

と福音書を暗記することを義務づけられた。五時半には晩祷があり、夕食後賛美歌を歌う特に長い集会があった。ナン先生は日曜日を、若い少女たちにキリスト教の意味と責務を教え込むことに割り当てる日と見做していたのだ。

ベシー・ウォリスはまたオールドフィールズで勉強もかなり良くでき、先生方は、彼女がオールドフィールズを敬愛するように、この「公爵夫人」を可愛がり、賞賛したのだ。奇妙な偶然だが、エリザベス・ボウズリライアンがグレンコーの美しさを崇め、その恐ろしさに震えていたその日に、ナン先生はベシー・ウォリスの母に手紙を書いている。

オールドフィールズ女子学校  
グレンコー、メアリーランド州  
一九十四年三月三十一日

親愛なるラーシン夫人

私たちはウォリスに、スカートの丈を合わせるため、水曜日の午後二時二十分の列車で町に行く許可を与えました。

彼女は信仰の篤い学生で、平均点が良く、さらに特別な許可を与えてもよいと考えております。

付き添いの者が五時十分の列車でウォリスを学校まで連れ

て帰るように、ユニオン駅で待つております。  
もつと自信をもたれることをお祈り致します。

敬具

A・G・マカロー

ベシー・ウォリスの母は、たいへんに素晴らしい、また幸運なことに裕福なジョン・フリーマン・ラーシンと結婚して、ラーシン夫人となっていた。彼は義理の娘を実の子のように受け入れ、愛情溢れる関係がベシー・ウォリスと義理の父の間に成立した。彼は彼女の精神と快活さを敬愛し、黒い髪 of 可愛い少女が遊んでいるところを見るのを好んだ。後に彼は年月を経て、彼女が一九十四年の春に、強い印象を与える、十八才の女性になったことを自分の目で確認するのだった。

ベシー・ウォリスは、彼女が学校に戻っている時、義理の父の加減が良くないと知らされた。それも母親がボルチモアのアパートから、健康的な海の風が吹いているアトランティック・シティへ引越そうと言いつ出すほどなのであった。それから四月の上旬のある日、彼女の授業中、ナン先生が彼女の机のところにやって来て、外に出るように言った。「私の部屋へいらっしやい。良くない知らせがあるのよ」彼女は優しく言った。

そこでベシー・ウォリスは知らされた。「とても悲しく思いま

す。けれどもあなたのお父様が亡くなられ、あなたにお葬式に参列するため帰宅するようにという電報をお母様がよこしたのです」それから彼女は、泣き止むまでその少女を腕に抱いて、彼女の目をハンカチでぬぐった。

「でも父はとても善良で、優しい人だったのです、ナン先生。私と母から父を取り上げるなんて神はどうしてそんなに残酷なのでしょう」

「神は残酷ではありませんよ。神は全能で、どんなにつらく、いやなことでも、そのすべてに理由があるのです。神の御意志が行なわれますように」

二日後の一九十四年の四月六日、ナン先生は喪服を着たベシー・ウォリスを駅まで連れて行き、ボルチモア行きの列車に乗せた。葬式は義理の父の姉妹の家で行なわれることになっていた。ベシー・ウォリスは彼女の人生で初めての大きな悲劇についてこう記している。

アパートに迎え入れてくれた召し使いは私を正面の部屋へと案内した。カーテンは閉じられ、外の明るい陽射しから、室内の暗さへの急激な変化に目を調節する時には、私はその部屋に誰もいないものと思った。すると隅に黒い人影がいるのに気がついた。それは母で、膝までかかる黒いクレープのヴェールにくるまっていたのだった。彼女は背を丸め、途方

に暮れた、痛ましい様子であり、私は胸が張り裂けるようだった。私が彼女の方に向かおうとした時、泣き声が出て、私は部屋の反対側に目をやった。そこには、閉じた日除けの前の窓腰掛けに一列に並んだ、三人のくずおれた人物がいた。それらは父の三人の姉妹で、重く、黒いヴェールを被り、声を合わせてそっとすすり泣いていたのだった。彼女らは私に運命の女神を思い出させ、私は母の腕に抱かれるのがうれしかった。

その悲しい一日はゆっくりと過ぎ去って行き、その夜は母に会ったその部屋で彼女と一緒に過ごした。

## 6

地球の裏側であるギリシャのアテネでは、ペシー・ウォリスの義父の死の十二年前に、ギリシャのニコラス王子と、ロシアのヘレン大公女の結婚式が行なわれ、二つの王室が一緒になった。ニコラス王子は、今日のエリザベス二世女王の夫君、フィリップ殿下の父であるアンドリュース殿下の弟君であった。

皇帝の姪として、ヘレン大公女は「帝国王朝王女」という際立った称号を冠する最後のロシア人の一人であった。彼女はまた息を飲むほどの容貌をもっていた。ニコラスの方とはというと、彼は「絵画、詩、読書、演劇、そしてすべての形態の美を愛してい

た。また類い希なユーモアのセンス、義務に対する熱意、そして深い信仰心があった」

彼らには、同じように才能の備わった、母親と同様に美しい三人の娘ができた。末のマリーナ王女は一九〇六年十二月十三日にアテネで生まれた。これら三人の王女たちの養育のされ方は、イギリスのジョージとメイの子供たちとはまるで対照的である。

この遠縁に当たる両家は、一九一〇年、エドワード七世が亡くなった時に再会した。ギリシャ王室が葬儀に招かれ、バッキンガム宮殿で「親愛なるジョージとメイ」と共に滞在した。彼らは、八月の上旬のある午後、ちょうどカウズのボート競技の直前に、二十人の側近を従えて到着したのである。新しい国王皇后の横に、少年たちとメアリーが、ギリシャの親類に挨拶するため呼び出された。

子供たちは以前に会うことがあったが、その時は打ち解けるのに常に堅苦しさや、自意識を伴ったので、イギリス王室の子供たちの中では、メアリーがいく分積極的に動いていただけであった。だが、親しくなるには年令の差が大きすぎ、一緒にいる時間が短かすぎた。今回は宮殿で三日間一緒なので事情が違う。ギリシャの王女たちは、押さえられないほどの快活さと澁刺とした魅力で、堅くなり、自意識している少年たちをリラックスさせることができた。そしてメアリーは接待側の責任を担って、自分自身の羞恥心と戦い、それに打ち勝った。

お茶の後のクローケーは次第に目茶苦茶になって、彼ら皆を大笑いさせた。七才のジョージは年齢からいって、オルガとエリザベスに最も近かったが、クローケーのゴールを引き抜いて、一列に並べてしまったのである。彼は最初にそれらを跳び越えようとしたのだが、ゴールの三つ手前で笑いながら倒れてしまった。足が少し不自由だったが、マリーナが次の番だった。

彼女もまた四つ跳び越しただけで、倒れてしまった。デヴィッドが後に記すところによると、「ジョージが親切にも彼女を起こしてやって、二人が芝生の上に横になって、クスクス笑い続けていたのを憶えている。その後私たちはボールを使つてボーリングを始めたのだが、それもすぐに多少目茶苦茶になったと思う。ボールが一つ湖に落ち、それは木でできていたので浮いていたが、マリーナ王女が靴を脱ぎ、中に入り始めたのである。一方それと同時にバーティーと私は、有能な水夫として手漕ぎボートを押出した。

「このようなふざけごとは、ギリシャの王女たちの乳母がやって来てすべて中断されてしまった。彼女は子供たちの名前を叫び、彼女らは皆彼女のところを集まったが、マリーナ王女は白いドレスをずぶぬれにしていた。バーティーと私は詫びを言い、メアリーも謝った。乳母はマリーナ王女にお説教をしたが、すぐに微笑んで彼女らを家の中に連れて行つた。王女たちは彼女を『フォクシー』と呼んでいた」

ギリシャの王女たちは、イギリス旅行でこんな気ままな時間を樂しめるとは期待していなかった。なぜなら宮廷はすべて喪に服していたし、前回は、ジョージとメイと子供たちの冷やかな接待と同様に、ロンドンの天候は雨天と寒さだという連想が働いたからであった。今度はまったく違っているのである。

しかしヨーロッパの多くの王室にとって、新しい世紀の最初の十年は、イギリスにおける、活動的な、生命を躍動させていたエドワード七世によつてまさしく象徴されるが、それは不穏と暴力と不安の新しい時代に素早くとつて代わられた。イギリスでは、打撃をもよおすほどのストライキ、ドイツ海軍の再軍備に対する日増しに強くなる不安、アイルランド問題、処理しにくい参政権拡大運動があつた。ドイツにおける問題も同じ程度であつたが、新聞や政府は国民の軍国主義や、初期症状の偏執病を刺激したのである。ロシアでの問題は一層深刻に根づいていて、革命でますます脅威となつていった。その一方でロシア皇后であるルイス・バッテンバーグの妹君は改革に対する運動を阻止したのである。

ギリシャではニコラスとヘレン、そして三人の美しい王女の平穩な生活が、一九一二年の対トルコ戦争の勃発と、一九一三年三月十八日のゲオルギオス国王の暗殺により、突然に崩壊してしまつた。長い間賢明にギリシャを治めてきた善良で、恐いもの知らずのデンマーク出身の王を射ち殺した銃声に、翌年今度はサラエボにおいても一発の銃声が続いた。それはマリーナと彼女

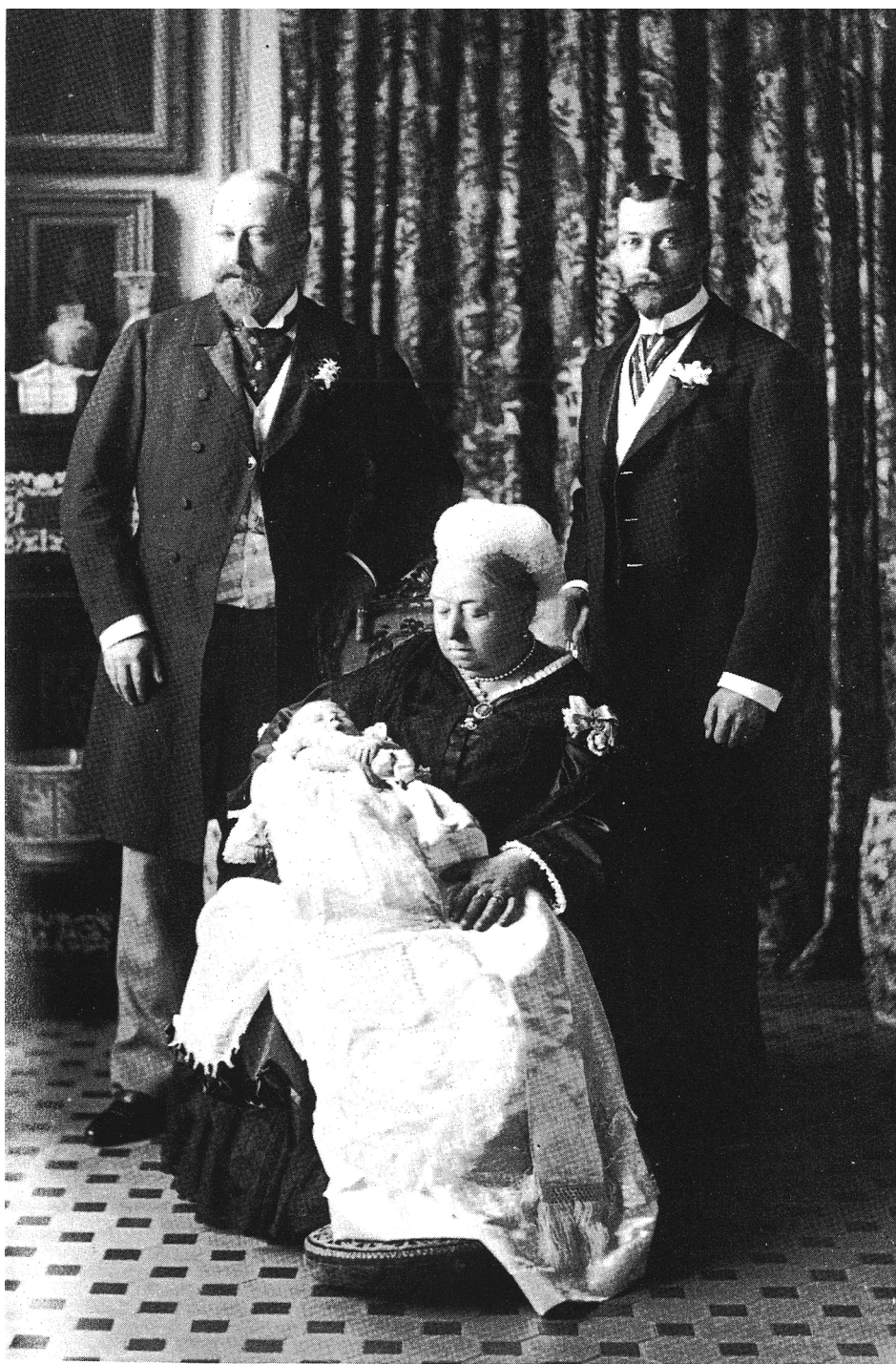


の姉妹に、彼女らが住み慣れた土地と財産を失う時を告げていた。それは、暴力と、友人や親類の死の知らせがありふれたものになった時代であった。微笑んでいる友人や親類との交わりを楽しむことを、自らの選択によって保証されることもなく、今やあちらこちらへの転居を彼女らは余儀なくされたのである。

## 注

(1) クレア・クーパー・ナイト・・・農夫ジェイムズ・ナイトの娘。後にメアリー・ボウズ＝ライアン（エルフィンストーン夫人）の子供たち、そしてその中の一人エリザベスの娘エリザベス（後のイギリス女王）とマーガレット・ローズの乳母となる。

\*掲載の写真について・・・第一章に付されていた写真を載せるのをすっかり失念していたので、ここでは第一章と第二章の写真を一緒に掲載することにした。



4世代の4人の統治者。後のエドワード8世の洗礼式にて、ヴィクトリア女王の両脇に息子と孫息子が立っている。





「可愛いジョージ」の子供たちが1900年の夏までに4人になった。オズボーン邸にて  
 ヴィクトリア女王と（椅子にかける）メアリー、デヴィッド、（女王の膝の上に）ハ  
 リー、（クッションにいる）バーティー。



2才のデヴィッド



4才のメアリー、ミレエの絵  
 のつもり？



バルモラルにて最愛のお祖父様と、(左から)  
デヴィッド、ハリー、メアリー、バーティー

5 番目の「ジョージのペット」  
ジョージを抱くアレグザンドラ王妃



2 才のバーティー





(左から) パーティー、デヴィッド、メアリーが撮影用になっこり。





「子供を生むことは私にはとてもうんざりすることですし、それに耐えるには多大な忍耐を必要とします」とメイは告白した。1906年における彼女の6人の子供たち。ジョンが腕に抱かれ、(左から右へ)メアリー、ハリー、ジョージ、デヴィッド、バーティ。





「私たちの可哀相なジョニー」とメイは末息子の死を聞いて書き記した。



ハリー



ジョージ



ハンスル氏（「ミダー」）、デズバラ卿と並ぶ1908年のパーティー





皇太子の叙任のためのいわゆる「馬鹿げた衣装」を着たデヴィッド